

第1回特許庁情報システムに関する技術検証委員会議事概要

1. 日時・場所

日時：平成23年9月8日（木）9：30～14：15

場所：特許庁16階第1共用会議室

2. 出席委員

遠藤 紘一 リコージャパン株式会社 代表取締役 会長執行役員

大山 永昭 東京工業大学 像情報工学研究所 教授（委員長）

三木 茂 スクワイヤ・サンダース・三木・吉田外国法共同事業法律特許事務所
弁護士

3. 議題

- （1）特許庁情報システムに関する調査委員会報告書（技術検証チーム）ご指摘に関する状況について
- （2）東芝ソリューション（株）、アクセンチュア（株）からのヒアリング
- （3）討議

4. 配布資料

資料1 委員会の審議内容の公開について（案）

資料2 当委員会の当面の進め方（案）

資料3 特許庁情報システムに関する調査委員会報告書（技術検証チーム）ご指摘に関する状況について

5. 議事概要

冒頭、委員の互選により、大山委員を委員長に選任するとともに、資料1「委員会の審議内容の公開について（案）」及び資料2「当委員会の当面の進め方（案）」について事務局から説明が行われ、委員会にて承認された。

- （1）特許庁情報システムに関する調査委員会報告書（技術検証チーム）ご指摘に関する状況について

資料3「特許庁情報システムに関する調査委員会報告書（技術検証チーム）ご指摘に関する状況について」について事務局から説明を行った。その後、討議を行ったところ、主な発言は以下のとおり。

- 残件の解消法だが、もともと三者の間で指摘されていた残件をTSOLが解消しますと言っていたこともあって、まずそこから解消作業を始めていこうとし

ていた。しかし、その解消が計画どおりにきちんとできたかという、なかなかできてなかったという事実はあると思う。

- 現実的には多分そうなのだろうと思う。残件を直したときに、一体どうしてその残件が出てきたのということまで遡らないといけない。
- 設計書の1割の残件を確認・解消する中で、残りの9割の残件に対する効果的な手の打ち方もかなり見えるのではないかと昨年指摘したつもりだったが、残件を解消する活動の中で、そういう知恵を絞り出して直したようには思えない。
- 「残件」には、中身のフロー、論理、ロジックがおかしいというもの、あるいは書き方、フォーマットがおかしいというものが、両方混じっている。概ね、機能的にここはおかしいのではないかという意味での残件が半分程度。さらに、ある部分の残件が、他の箇所の残件と関連していて、当該他の箇所の残件を解決しないと元の部分の残件も解消できないというのものもある。これら以外に、単なる記載ミスも相当程度ある。
- 残件が増えた中には幾つかのパターンがあり、その多くは、ある残件を発見し、それを他の設計書に横展開したときに、ここも同じようにダメだった、ということが増えてきたもの。もう1つは、横展開してよく精査すると、1割を確認する中では見つかっていなかった新たな種類の残件が見つかったというものがある。
- T S O L側からは、規模的な問題が非常に大きく、60Mという規模はどうにもならないという話があり、残件を処理するだけでなく、共通化していかなければならないということになった。
- T S O Lに、まず全体スケジュールを提出し、それから直近のスケジュールを出すよう依頼してきたところ。その上で、どういうスケジュールで共通化作業、残件の解消を計画していくか、という話を進めてきた。これらスケジュールの提出については、何回か期限を延期したが、結局出てこなくて、共通化作業、残件の解消が止まった状況である。

(2) 東芝ソリューション（株）、アクセンチュア（株）からのヒアリング

特許庁情報システムに関する調査委員会報告書公表以降の取組について、東芝ソリューション（株）（以下「T S O L」という。）、アクセンチュア（株）（以下「アクセンチュア」という。）より説明がなされた。その後、質疑応答が行われたところ、主な発言は以下のとおり。

<東芝ソリューション（株）からのヒアリング>

- 残件の発生原因として、共通したものはあるか。
- 通常、プログラミングでは「クローンの弊害」とかよく言われていて、クローンは作るべきではないのだが、このプロジェクトでは、設計段階でクローンを

非常にたくさん作ってしまい、明らかにクローンの弊害が出ている。つまり、既に検証された部分をコピーペーストしてクローンを作るのではなくて、品質が検証される前の段階でクローンをつくってしまっているの、元の設計箇所
に問題があると当然そのクローンの分だけ修正対象箇所が増えていく。

- そもそもユーザアプリケーションを相互に疎な関係として作りたいという考え方があり、これは特許庁の要望であった。そういう関係を実現しようとする、同じようなソフトウェアが作られることになるがそういうことかと確認したところ、T S O Lの回答は、コピーペーストするという話であった。そこで、修正が必要になったらどうするか聞いたら、それは大もとを直して、同じことを他の部分でもやれば修正できる、という回答をもらった記憶がある。普通に考えると、これはそのとおりである。大事なところは、では、どの業務のところ
にどの部分の元のソフトウェアをコピーペーストするのか、あるいは修正する場合において、どの元の部分の修正を他のどの部分の修正に展開するのか、その管理表はあるか質問したら、それはないという回答だった。この点、特許庁が言った「疎に作りたい」という本来の目的を達成する話と、ソフトウェアの設計管理をしながら、実行可能なプログラムをどううまく作るかというのとは別
の話であり、疎に作るという要望があったから実行可能なプログラムが作れないという話ではなく、そもそも両立する話だと思う。管理をせずに別々に設計してしまって、後からどこが共通化できるかを探しているから、今大変なことになっているのではないかという気がする。
- 共通化は幾つか案を出された、あるいは実際に行っているところもあると思うが、出来上がる目処はどうか。
- 複数の業務にまたがった共通化というのはかなり難しく、複数のチームが関係するため、そこで検討させるというのは途方もない時間がかかる。

<アクセンチュアからのヒアリング>

- これまでの経緯を見てきていると思うが、今の状況のT S O Lで当プロジェクトをやれるかというときに、どういう印象を持っているか。
- 3月4日に終了した最上位意思決定会議での当方の結論は、UA 開発着手までの設計完了責任を果たしていただいた上でT S O L社に共通化の作業を終えていただくところまでやっていただきたいと申し上げていたが、その後の現場での議論の中で、その共通化作業の実現は難しいのではないかとということで、現在の見解は、過去にさかのぼってその設計としての完了点を見つけるべきだというふう
に書いた。T S O Lには、残り部分の作業を任せることはできないと認識している。

- ロールバックポイントは分かるが、どの辺にあるか感覚的に分かっているか。
- まだ私どもと特許庁を含めた中の合意点はまだ見出せていないが、ゼロに戻るということはある得ないと思っている。もっとも、成果物について、特許庁を含めてその全体を見渡して、品質的なところまで確認した中で、有意な成果物であるか見出せるかということ、その点については議論が残っていると思う。ただ、全くむだかということではなく、あくまでそれを成果物として判断するのか、次に作業を行う上での参照的な付録物として見るのかについては、議論がある。
- 設計書がどうしてそんなに膨らんだと考えているか、今この時点で過去を振り返ったときに、もう一回お考えがあれば教えてほしい。
- 膨らんだ原因としては、プログラムの数がふえたわけでも業務の量がふえたわけでもない。要するに1個1個の設計書が膨らんだという事象。
- T S O L が作って今あるものが全部いいできのものになったら、特許庁が考えている新しいシステムはちゃんと稼動するのか。すなわち、できは悪いけど漏れはないということなのか、すなわち、全部動くようになったとしても、つながったとしても、まだいいのかわからない、ということなのか。
- 現状、事実として成果物のうち、一部を特許庁の方々が検証されたに過ぎないので、要件的な漏れを誰かがすべて確認したという事実はない。なので、現状で漏れがあるかないかと言ったら、それは漏れがあるというふうに認識している。
- 平成23年3月時点の想定では、T S O L の作業として設計完了を目指すべき、という考えだったと思うが、今ではその考えが変わっていると理解したが、なぜ変わったのか。
- T S O L 社の共通化していくという提案自体はよかったと思う。だが、それを特許庁の設計の具体的な工程の中で、どのように実現し、どのスケジュールに沿ってやっていくのかというところが、肝心のT S O L から出てこなかったということで、これではこの共通化が目測どおりにできるだろうという見地には立てなかった。ある一定の成果物ができた後、その成果物を元に、私どもは大体このくらいの期間でできるだろうと示すことはできるがそれは想定に過ぎない。成果物を元に明確な作業工程と工程の時間を提示できるのは、自らの社内に残っている成果物の途中の状況と、自らが抱えているリソースの状況を一番理解しているT S O L を除いてない。ところが、当該の担当の方から具体的なものが出来なかったのもので、これは難しいだろうということで、このような判断に変わった。

(3) 討議

上記(1)(2)の内容を踏まえ討議を行ったところ、主な発言は以下のとおり。

- 今日の各者の話を聞いていると、アクセンチュアは、もう思いの上では止まっていた、という感じなので、印象としてもうほとんど破綻しているのかなという感じがする。
- アクセンチュアの話聞いていて、最後の方になって見てみると、ロールバックしてそれで使えるものを参考としてやっていくというところが、どの程度できるのかということになる。
- これまでうまくプロジェクトが進まなかったのは、うまくいっているところ、うまくいっていないところがばらばらで、統制がとれていないというのが原因であり、どこまでロールバックしたらできる、という議論をするのは非常に難しいのではないか。
- TSO Lすら、このプロジェクトを少なくとも今のまま進めていく可能性があるとはおっしゃらなかったし、アクセンチュアも手戻りすることを前提とした議論だったと認識している。

以上